

あそ 12
2014



カフェ傳

遠きミャンマー



パゴダからにじみ出る夜大トカゲ

佐藤喜孝

あそ

十二月

蟬

佐藤喜孝

東京

秋風裡まなこはぬらすためにある

寝る前に窓あけて閉づ桃青忌

A型をO型にしてぬくめ酒

雪の来し山見ゆ通勤電車来し

十二月烏啼かぬをいぶかしむ

木星のひかりとどける夜の雪

雙六の上りのやうに浮寝鳥



俳友の高橋鷹史さんが五百頁余の文庫本二冊の全句集を上梓された。一頁三句組の膨大なエネルギーに圧倒された。帯文に「俳句は化物」と書かれてゐるが別な意味でも相槌を打った。

春

竹秋や婆の出あるく乳母車
亀鳴くと腹這ひに夜をふかしをる
山ひとつ違ひてのぼり春の鐘
日永くなりし鶯張りの廊

夏

鬼百合や衣ずれに似て山の風
矢の尽きしやうに孔雀の抜羽かな
引きよせて昨日のからすうりの花
薫風や巣箱の穴のみな丸し

秋

妻の手を借りて遊びぬかやつり草
日帰りの日暮れてあたり蕎麦の花
亡きわれを夢に見しをり秋昼寝
飴舐めて頬ふくれある生身魂

冬

埋火のやうに鯉をり寒の雲
初霜や友だちの飼ふ兎見に
除夜の鐘貫くごとく先づ一打
太古より日は空にあり蓮根掘

☆

吉弘恭子

東京

水葬のやうに雨受く金木犀

蟬よ鳴かぬか空蟬になる前に

篋の風にのりたる秋の蝶

あさがほのうつかりしたか夕方まで

半月の少しふくらむ上枝陰

術なくてゴミ箱の餌秋の鴉

零余子飯茂の手からアルミ弁当

☆

赤座典子

東京

ほかほかの湯上りの嬰昼の月

十日余の列島縦断大台風

駅中の八百屋で探す十全茄子

新豆腐梅ちゃんといふ友の在り

女子会や意見の多き初さんま

秋うらら爪繰るものを手放さず

劇場に屋上庭園秋日傘

十月十二日今年も誕生日が来た。
これで夫との年の差はなくなった。
誕生日が来ない時は半年しか遅くなく
いのに一つ違いを主張していたが、
これで若さも並んだ。

外から見ると足いたそうですね！
と言われるが歩いている時は殆んど
感じない。長く同じ姿勢でいると固
まってしまつて戻るのが少しばかり
時間が掛つてしまう。我が家は台所
が一階、食事するところが二階と不
便だが、家を立て替えた時には承知
のはずだった。仕事場を一階に設け
たので致し方がなかった。それがい
つの間にか階段の上り下りが運動の
補助になっている。というわけで毎
日屋上から一階まで何回上り下りし
ているのだろうか？

食事を運ぶのでも両手に二つのお
盆を持って上り下り。毎日がいいト
レーニングになっている。



☆

井上石動

山梨

ママちやりの空気上々秋日和

納屋壁へ影やはらかし木守柿

筆ぺんの軸に温みや冬はじめ

朴の葉のしづかに落つる晴夜かな

ふるさとは胸の内のみ一茶の忌

減額の年金話竜の玉

コップ酒関東煮と空きつ腹

悼 高倉健さん

王

岩

名古屋

山眠る高倉健の姿かな

レクイエム奏でよ紅葉散りにけり

雪霏霏と静まり返る山河かな

しんしんと降る雪の花御霊かな

爛酒を旅立つ君に捧げけり

寒林のしじまや入日巖かに

貯まるばかり……………

貯金通帳の私の残高の話ではない。テレビは週刊予約をし、興味の番組を後刻。もちろん全部観られるわけではないが、「保存版」と判断する番組はディスクに保存。その数が半端でなくなってきた。

常時不満げな家人には「百科事典代わりだ、何かの折の。」と、弁明している。

こんな風に、本、テープ（カセット・ビデオ）類ともども、私の周りに溢れて来る。

いつか、病氣入院でもした時に、その暇つぶしに・・・と己に納得させてはいるが、

この「いつかの為」が、物を溢れさせる人間の定番らしい。が、やはり処分できない。そのどれにも愛着が湧き……。

私に事あったとき、倅たちが、この「父の愛着品」を引き継いでもくれそうもなし。

いわんや家人をや！ 結局捨てられるだけのサダメ。

かくて本日も、業のごとく、せつせとダビングをしている拙者。

来日してそろそろ満二十一年になるうとうとしています。一年の予定でしたが、こんなに日本にお世話になるなんて夢にも思いませんでした。いろいろと大変ですが、来てよかったです。と思います。

高倉健さんは私が十八歳ぐらいの時、「君よ、憤怒の川を渉れ」という映画を介して知った日本人のスターです。「君よ、憤怒の川を渉れ」は中国では「追捕」というて上映されました。その後、彼の主演した「幸福の黄色いハンカチ」も大学生の時に見たことがあります。去年頃か「あなたへ」という映画をテレビで見ました。彼は映画を通して中日友好にも貢献され、中国の人々にも大変愛されています。〈メールより〉

月 蝕

大日向幸江

埼玉

村守るお地藏さんの更衣

金目鯛手にあまりある大物で

月蝕や会へない人も月眺む

野分去り町にスタバの緑の灯

来ぬ人の話しも尽きて秋暑し

銀漢や揺れ繰返す大噴火

晩秋の午後のコーヒー甘くせり

祝 日

斉藤 裕子

東京

使ひきつてゆきたいのち秋海棠

台風来鴨十八羽溜り場に

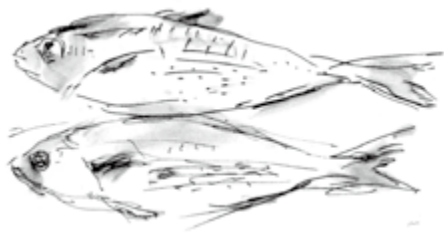
台風一過伸びして起きたううーんと

台風一過心配事も吹き飛んだ

台風裡路地の風鈴鳴り止まず

散歩道銀杏拾ひに仲間入り

秋深し夫のひと言大丈夫



地球温暖化の影響で、日本の気候もひと昔前に比べて随分変わってきた。台風の通り道も変化しようだ。小さい頃私の育った鹿児島は、毎年のように台風が上陸していたような気がする。台風接近となると、閉めた雨戸に長い棒をかけ紐で縛ったり、大きなバケツに水を汲み置き、蝋燭や懐中電灯を準備したりと結構忙しかった。大きな台風が過ぎると数日間停電なんて当り前の事だった。結婚して東京で暮らすようになった。台風が近づくと実家の事が気になり電話した。

しかし、ここ何年も、大丈夫だったという時が多い。この頃鹿児島、正確にいうと串木野を逸れて通過していくような気がする。その代わり、違う土地で大きな被害が出ているニュースを見ては胸が痛む。

「備えあれば患いなし」とは言うものの、自然の脅威に人間の無力さを感じる近年である。

☆

篠田

純子

東京

ひよつとこの白目の力秋祭

献饌のみかん一個を取り落す

大黒に小槌振らるる秋日和

烏瓜の下猫の行く猫帰る

小春日の鷺もったりと羽づくろひ

鶉も鷺も陸で寛ぐ小春風

冬初め白湯に力のありにけり

山 芋

定梶じよう

石川

流れ星夜釣の竿の鈴が鳴り

りんだうや釣れずて帰る切とほし

秋耕の遠くてみんな祖父に見ゆ

秋夜読めば切り抜きされて一ページ

逃奔す銀河に遠く救急車

鞠躬如菊人形の下郎かな

掘りあげて赤子のやうに山の芋

今年の思い出す。

去年も行ったビヤホールの日、(八月四日)に、銀座七丁目のライオンへ娘と孫を含む家族で出掛けた。ビールは半額なので思いつき飲んだ。孫達の食欲も凄まじい。七時過ぎた頃、サンバのリズムが聞こえてくると、一年生の孫がピョンピョン跳ねはじめた。三歳の孫は大きな音にびっくりしている。やがて、色とりどりの羽根を着けたダンサーが店内を周り始めると熱気ムンムンとなる。しかもどのダンサーも、孫達の坊主頭を撫でまわしている。子供と言えど男は男。でれつとした顔に将来を想像する。「来年もジイジに連れて来てもらおうね」と言うと、二人共大きく頷いた。

子孫繁栄を確信した夜だった。

「潮騒」の語は殆んどどの辞典に、潮の満ちてくる時にたてる音、と説明してある。海辺に住んで、引潮であつても潮騒の間こえることを経験している私には、何とも不可解な説明だ。文法的な叙説が最もしっかりしている『小学館古語大辞典』も満ち潮云々とある。で、私が高校生の時以来利用する佐伯梅友・馬淵和夫編の『講談社古語辞典』。大変頼りになる辞書で、やはり他書とは違っていた。ひいてみると、「さぬ」は「騒ぐ」の「さわ」と同語源、元来は「さわさわ」「さあさあ」「さやさや」等の擬声語であつた、潮が騒ぐこと、との確に説明している。もっとも、大冊辞書の『日本国語大辞典』には、満ち潮云々は愛知県知多郡等での方言、とある。他書の説明はこんな所からきているらしい。

十月

須賀敏子

埼玉

峡暮れて秋明菊の仄かなり

山粧ふ武甲の嶺のまた狭く

安達^{あだ}太良^{たら}山の巒に紅葉始まれり

九十九折総て紅葉の秋三郷

新米を二十キロとは妹よ

父島の塩で新米むすびかな

それだけで手造り味噌と新生姜

千代紙屋

田中藤穂

東京

花蕎麦やたちまち暮るる八ヶ岳

戻りきて部屋にこぼせる萩の花

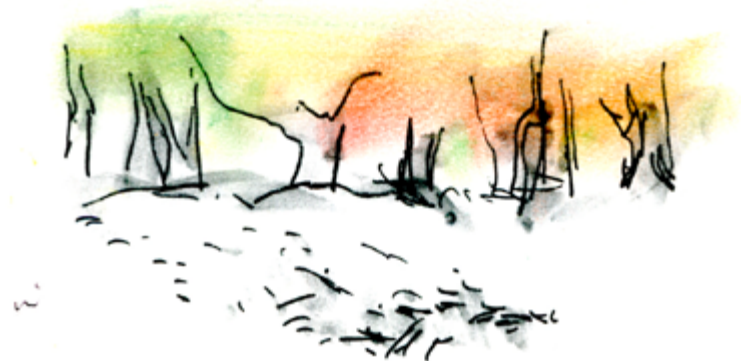
三夜寝れば憂きこと忘れ紫蘇の花

土に還り天へ還るよ酔芙蓉

純白の秋バラ愛子様の薔薇

烏瓜飾り海辺のカフェテリア

秋しぐれ三崎町に千代紙屋



十月八日の皆既月食は私の家の庭からもよく見えた。始めに見た時は半分近く欠けていて、じっと見ていると左下の欠けた部分が序々に広がって、しかし上の部分はきらきら輝いている。昔から月をあまり見つけてはいけなと言われていたが、本当に何だか魂が吸われてゆくような不吉な気もする。肌寒くなって家に入ったがどうなったか気になって出たり入ったり、そして遂に全部欠けてしまった。けれどもそこには暗赤色の球体が見える。神秘的だ。

こんな年齢になってこんなつぶさに皆既月食が見られてよかったと思っただが、縁側から何度も下りたり上ったりしたお蔭で、膝の痛みがいまだにとれずに困っております。

霧

長崎桂子

三重

霧を来て展望台も無色なり

山上の石碑らしきや霧ふかし

霧動く人の動きも始まれり

糠床に入るか思案の秋茄子

稔田と休耕田の視野の風

秋の雲山盛のホイップクリーム

秋の雲アフリカの動物走る

花八ツ手

森理和

東京

門前に大手を拡ぐ花八ツ手

さまざまな虫の集まる花八ツ手

花八ツ手蜂の脚先白団子

留守宅の八ツ手の花に軽会釈

三色に海原分れ秋日和

波砕く突先に風車花芒

棒とバケツ木の実拾ひは兄先頭

六月から十月初めまで六回の台風
の接近と通過の影響、それと偏西風
に因る異常な竜巻、雷、大雨の注意
報、警報に備える準備と後片付けで、
膝と腰の痛みに苦しんで、少々不自
由な毎日となった。

ある日歳を重ねても、日常動作に
必要な元気な脚力を取り戻すことは
可能です。と言っ冊子の記事を目に
しました。

大きな筋肉と深部の筋肉をきちんと
と保つておく事が大切で、使うこと
によって筋肉を衰えさせない様に、
必要な栄養をしっかりと摂って、毎日
動かしていれば「筋肉は裏切りませ
ん」の専門の先生の記事を信じて
励んで居ります。



日は天に憚然としたる通し鴨 佐藤喜孝
物言へば首傾ぐ犬霧時雨 森 理和
歩を共にするかここから蝸牛 吉弘恭子
朝日のアおしまひのンずぞごだま 赤座典子
ガイドさん松虫草を見てゐたる 井上石動
取らずおく上着に付いた草の実を 大日向幸江
雲払ひ上りきつたる今日の月 斉藤裕子
懸命にしかし適當盆踊 篠田純子

忽ちに華やぐ燈火桃置けば 定梶じょう
雨が行く夏の終りを告げて行く 須賀敏子
望の月泰山木を離れゆく 田中藤穂
せせらぎの音も秋冷となりみたり 長崎桂子
電車待つ足元へ猫葉鶏頭 森 理和
井戸ポンプの錆びは金色秋彼岸 篠田純子
晩秋のほかなにもなき驛に降り 佐藤喜孝



油蟬池は水輪をひろげをる

佐藤喜孝

作者は、耳には苛々となる執拗な油蟬の鳴き声を聞き、目には水辺の水輪の広がる様を見ているのである。油蟬と水輪には因果は無いのだが、次第にボルテージの上がる油蟬の鳴き声と、どんどん拡がる水輪に、作者の熱気も高まって行く。やがて静かに…。そしてまた、油蟬、水輪、作者のボルテージが上がり始める。何度も何度も。作者が水辺を離れるまで。(純子)

物言へば首傾ぐ犬霧時雨

山荘慶子

愛犬家、愛猫家にとっては犬猫には自分の言葉が理解できると錯覚してゐる向きがある。かう書いただけで反論が来さうだが。掲句、犬の

散歩をしてゐるのであらうか。さうでなくともよいが犬に何か話しかけた。犬はたまたま首を傾げた。「うーん、なあに？」といふやうに。霧時雨のなかで犬との交情が静かにさりげなく優しく詠まれてゐる。(喜孝)

朝日のおしまひのんずすだま

赤座典子

「朝日のおしまひのん」は通信省が使用してゐた和文通話表といひ今でも使はれてゐるさうだ。通話表のはじめと終り、そして季語をあしらつたのみの句であるが良く計算されてゐる。朝日、と明るい語彙ではじまりなつかしい子供の遊び道具でもあつた数珠玉で締めつけてゐる言葉が時代を反映してゐて面白かつたの

で書きとめてみた。

朝日のア・いろはのイ・上野のウ・英語のエ・大阪のオ・為替のカ・切手のキ・クラブのク・景色のケ・子供のコ・桜のサ・新聞のシ・すずめのス・世界のセ・そろばんのソ・煙草のタ・千鳥のチ・つるかめのツ・手紙のテ・東京のト・名古屋のナ・日本のニ・沼津のヌ・ねずみのネ・野原のノ・はがきのハ・飛行機のヒ・富士山のフ・平和のヘ・保険のホ・マッチのマ・三笠のミ・無線のム・明治のメ・もみじのモ・大和のヤ・弓矢のユ・吉野のヨ・ラジオのラ・りんごのリ・留守居のル・れんげのレ・ローマのロ・わらびのワ・おどのオ・かぎのあるエ・尾張のヲ・おしまひのン。注に日本はニッポンと読むとあつた。(喜孝)

嫁ぐ子のやせしくなりぬ実紫

井上石動

私が嫁ぐ時父に「そう何でもかんでも持って

行かなくてもいいじゃないか。」と言われた。一度壊れかけた縁談だから、決まるとなると凄いい勢いで荷作りを始めた。親の気持ちなどこの句を見るまで、思いもしなかつた。作者のちよつと淋しい気持ちと、嬉しさが「実紫」という季語にぴったり合つてゐると鑑賞した。(純子)

ガイドさん松虫草を見てゐたる

井上石動

この句のガイドさんをバスガイドでなくともよいのだが、バスガイドと想定した。一对多勢の緊張を強いられる車内。目的地か休憩地に着いたのだらう。ひとり人々から離れて高原に咲く松虫草を見てゐる。そのガイドさんに関心を持つて見てゐる作者がある。的確な人物描写でガイドさんの心理状態が描かれてゐる。

薄氷に指を触れたるバスガイド 金子蛙次郎

(喜孝)

カーペンターズの声に乗りくる赤蜻蛉 大日向幸江

この句のカーペンターズの曲は何かと考えた。一つ目の楽しさだ。勝手に「クロストウーユー」では？と思い、決めた。この曲に合わせ蜻蛉が飛ぶところを想像する。二つ目の楽しさだ。カレンカーペンターの澄んだ、柔らかな歌声に合わせ蜻蛉がツーツーツー……。もしかしたら、声の綺麗な作者が歌っているのかも。秋の空気の中、蜻蛉に付き纏われている作者が見える。(純子)

取らずおく上着に付いた草の実を 大日向幸江

わたしも昨春秋、舎人公園で盗人萩をこれでもかと着けてしまった。私に相応しい勲章を頂いたうれしい気分になった。作者も同じやうな心持になられたのであらうか。童心に乾杯。

たかが草の実といふが、「オナモミ」が絶滅危惧種になったと読んだ。雑草と思はれる草でも外来種に負けてしまふらしい。敵は「オオオナモミ」といふ。日本在来種が外国で活躍してゐるものがあるのだらうか。(喜孝)

懸命にしかし適當盆踊 篠田純子

街の盆踊の踊子の様子を論破してゐる。懸命に前の人の振りを見よう見真似で慣れぬ手つきで手足をばらばらに動かして踊ってゐる。二三周するうち、様になってくる。さうすると後は適当に踊って楽しむ人もゐる。風の盆や阿波踊と違ひ飛入りが許される参加型の街の盆踊である。(喜孝)

忽ちに華やぐ燈火桃置けば 定梶じょう

燈火より桃の方が明るいといふ錯覚をいだ

望の月泰山木を離れゆく 田中藤穂

く。桃を置いたら部屋が華やいだ、では普通の句になってしまふ。ワット数の少ない燈火ではないのだが、なほ一層桃のお陰で華やぐ、必然的に室内も華やぐのである。結果は同じやうであるが、全く違ふものである。(喜孝)

新潟の人は音を見分けたり 須賀敏子

私の祖母は新潟に住んでいたが、茸を採るのが上手だった。東京では見たことのない変わった形状の茸だった。塩漬けにして保存していた。

私は一度だけ、わらび採りに祖母に連れて行ってもらった。何処にわらびが自生しているのか、頭に入っていて、急斜面も走り降りていた。私は十才位で祖母は六十後半位。私は役立たずだった。新潟の人の一部は、縄文人に近い能力が在ると思う。この句の、「見分けたり」の作者の感嘆が、共感できた。(純子)

近頃読んだ本に『江戸俳句百の笑い』(復本一郎)がある。冒頭「俳句は「淋しき風情」か」といふ表題ではじまる。

〈古池や蛙飛びこむ水のをと〉を採りあげる。この句は「かはづ」一茶の蛙は「かへる」と読み庶民の生活に直結してゐる殿様や赤蛙をイメージする。和歌の蛙は美しい声でなく河鹿蛙。芭蕉は、そんな鳴く「かはづ」のイメージを払拭するために「古池」に飛びこませたのである。蛙の飛びこむ音はきわめて小さい。その音が聞きたるほど辺りは閑寂なのである。その閑寂さによってもたらされる「淋しき風情」——これこそ皆さんが俳句という文芸に抱いているイメージではなからうか。ところが俳句は「笑

「い」の文芸なのである。そのことを、以下、
具体的な作品を通して述べてみたい。

概略このようにしてこの本ははじまる。興深
かった。

この本に習へば掲句は笑いを誘ふ俗語は微塵
もない。かすかに「離れゆく」におもしろみがある。「北山にたなびく雲の青雲の星離さかり
行き月も離さかりて 万葉集」は星からも月か
らも青雲が去ってゆくといふことらしい。和歌
では星月はなかなか動かないらしい。俳句とな
ると

名月や松を離れて風の聲 正岡 子規

月われを離れて天へ昇りゆく 粟津松彩子
などがある。山や山の端を月が離れる句は多
かった。掲句を読むと「泰山木」で視線を高見
へといざなひ心はればれとする拡張のある句で
ある。(喜孝)

せせらぎの音も秋冷となりあたり 長崎 桂子

秋来ぬと目にはさやかにみえねども風の音ぞ
おどろかれける 藤原敏行

と、音により季節の変化を感じられることがあ
る。桂子さんはもう少し精しく「秋冷」をさせ
らぎの音に覚えたのである。繊細な感覚であ
る。秋冷一語によりこの句、景立上がってきた。

(喜孝)

電車待つ足元へ猫葉鶏頭 森 理和

地方へ行くと駅との境が有るにはあるが都会
のようにとはつきりしない。プラットホームには
出入り自由な駅もある。道路と駅がスムーズ
につながってあるところも見た。そんなホーム
にたたずんでみると、どこからか猫が出て来て
人怖じもせず足元に纏はりついてきた。葉鶏頭

にも猫にもわたしにもプラットホームにも秋の
日差しを遮るものがない。暖かいひととき。(喜
孝)

井戸ポンプの錆びは金色秋彼岸 篠田 純子

秋といふ語が入った句がわたしのデータベ
ースに四万首・句近くあった。これに赤青などの
色名の入ったものがどの位あるか雑ではあるが
調べてみた。7.5%ほどあった。頻度が多いといふ
印象を持った。色名の入ったものを百%とする
と想像通り白は大半の35%を占めてみた。

石山の石より白し秋の風 松尾 芭蕉

白川や屋根に石おく秋の風 向井 去来

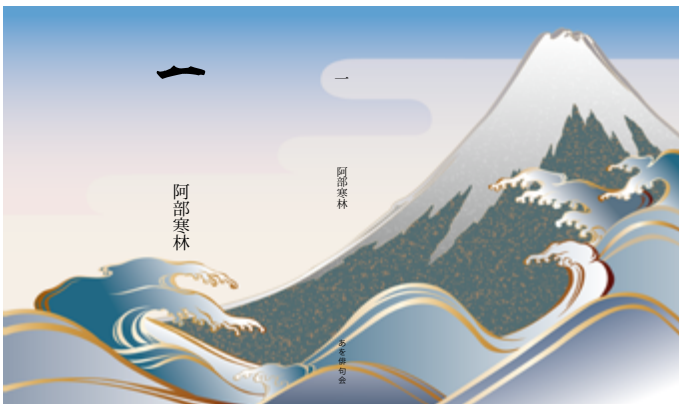
秋風は蛇のぬげがらより白し 富澤 赤黄男

である。次いで多いのは紅・青の10%強、掲句の
金は赤とともに10%弱。秋風のことを金風とも
いふがこれは五行から来てゐるので色のイメー

ジは少しは有らうがあまり関係ないやうだ。

ポンプの錆を金色に見えたとは存在感のある
井戸唧筒である。墓参の時期にはこの寺のポン
プは大活躍するのであらう。





句集 二 ほか

二〇〇〇―二〇〇四

先立たれ又先立たれ葉ざくらへ
 藤房を弛ませてゐる少女の掌
 藤色の塵掃く藤に触れながら
 蝶生れて正午も遙か過去となり
 紋章の菊に泣かされ敗戦へ
 落ちて転がる榎植や弥撒の鐘響く
 千段の最後の登り蟻走る
 日に眠る蛇は優しき貌となる
 蟹からは血の流れずに多喜二の忌
 駅を出て一円拾ふ雲の峯
 校庭を犬が横切る夏休
 虫の闇それでも白い雲がある
 胼の手の記憶の母よ剛かりし
 いちまいの枯野の裏は闇の空
 黒髪に籠るひかりや露の臺
 友の死へ雪野を過ぎる貨車の列
 水族館出て早春の日に濡れる
 雛三たび飾りて死なむ四十年
 病む父の指バリバリと夏柑剥く

きれいな川汚い川も春の川
 群れ咲けば咲くほど淋し映の著我
 曇天をやはらかくして八重ざくら
 骨組の恐竜を見て蟻を避け
 梅雨に入るわが家に唐傘合羽なし
 大雪溪黒一点の蟻となり
 遠雷となりて多佳子の忌は暮れて
 落し文密書となつて拾はるる
 転がつてゐるさくらんぼと赤ん坊
 往生に順番はなし柳絮とぶ
 スクリューが止まれば消ゆる夜光蟲
 桁無くて過去に戻れぬ虹の橋
 悪役を飾り立てたる菊人形
 枯れ初む野を輝きて恋乙女
 秋出水テレビ相撲は押し倒し
 墓地へ行くだけの道なり木の実降る
 島の路地秋鯖色に暮れ初む
 奥飛騨の雨縦横に濃紺菊
 樹の瘤に触れて別れる秋の暮
 山眠るひとり不眠の浅間山

二〇〇五―二〇〇六

真青な空あるばかり虎落笛
 枯山を下り切るまで会話なし
 みんな背に影をかくして日向ぼこ
 梅林を抜けてぶつかる海蒼し
 八重桜散るや饅飴を食べにゆく
 路別れ又別れ草みどり増す
 鑑真和上上野に在はし春は逝く
 春潮やここから先は滑走路
 石段は寺社につきもの濃山吹
 牡丹園出るまで傘を開かずに
 青鬼灯ぐんぐん祭の色となり
 私に触るる麦穂山裾までつづく
 蟬鳴きし人哭きし八月十五日
 ぶら下がるため蓑虫の攀るなり
 海光に畳鯛の乾きつつ
 薄羽蜻蛉悪事はたらく暇もなし
 葡萄熟れ愛されて死の長寿犬
 金鉢の如赤松の茸山は
 落鮎の早瀬故郷の海つづき
 芒野の沖へ棺を流すなり
 踏みつづす音の木の実や孤独なる

美しく姉妹育つ狩の宿
 月明の底に自販機煌々と
 水面に水中に路鳩潜く
 秒讀みの人生となる寒星座
 いつまでも船の別れは見えて冷ゆ
 変貌の大川端やさくら餅
 貝塚の白き貝より蝶生る
 紙飛行機しばしは春の雲に乗り
 紫木蓮一片身を打ち墓石打ち
 雪深に剥き出しの岩灼けつづく
 螢火や遠く列車の笛流れ
 両岸の夜は花火見る場となりぬ
 ミサイルに戦き育つ雲の峯
 赤旗は遊泳禁止雲走る
 揚羽二羽纏れに纏れわれに触れ
 源流は黒部も指を濡らすほど
 秋の蝶古るびし翅を使ひ詰め
 赤ん坊どこも柔軟くて十三夜

二〇〇七―二〇一〇

風花に漂ふ思慕や遠汽笛
 花は五分銀座老舗のお葬式
 信号をわたりて花の寺の前
 梅林の出口は有らぬ方にあり
 連翹の明るさに泣く少女かな
 看経の中を笹鳴通り過ぎ
 風知草揺れて綺麗な風を生む
 紺碧の天の静まり雪崩跡
 蟻動くときは必ず走る時
 密談の談笑となる夏座敷
 兄の死へ朝顔の蔓宙に伸び
 森閑と灼くる都心や盆休
 点す家点さぬ家や秋の暮
 鯛がさらに寂しさかきたてる
 恋幾たび柘榴真紅の実をこぼす
 吉か凶か銀杏あまた落ちる朝
 三輪車泣きながら踏み春の昼
 草の名をいくつか覚え春惜しむ
 草いきれ草も必死に生きてをり
 陽炎の底に溺れる金目鯛
 燕の子築百年の軒に生れ

螢火の一火たりとも落着かず
冷奴世の淋しさを崩しける
老犬を偲べばあはれ青葡萄
転勤のたびの氏神秋まつり
虹が頭つ火事の黒煙包みこみ
不治の人見舞うて燃ゆるシクラメン
耀へ馬牧は雲雀の空となり
懇ろに猫葬りきて枇杷を剥く
生きものの一つも見えぬ青薄
無駄骨と思はれがちに大噴水
寄れぬまま日傘同志の立話
秋蟬の夕べ逢へずに帰るなり
指一本海に触れずに夏終る
花野中迷ふことなく水流れ
悲喜の悲の多き現世虫の闇
一葉忌井戸端会議いまはなし
抱擁を見下ろしてゐる寒鴉
見舞はれつ見舞ひつ年の迫りつつ
春雪に釘をこぼしてそのままに
一本の除雪の道は駅に果つ
二枚目も今は老け役春の雨

春の川水の他には流れなし
逆縁の母にも母の日が巡り
高階の映画館降り夕立かな
さくらんぼ必ず一粒づつ食べる
二〇一〇—二〇一四
炎天に焼かねばならぬものを焼く
川は音立てずに流る稲架日和
水際を飛沫を上げて蟻走る
「新世界」第二楽章年迫る
雪山となりても生きるものは生き
馬の尾の空打つ乱れ春の風
本当はずしんずしんと墓
風の中の藤房となり背信へ
路次の角四葩の濡れし葉に触るる
木枯逝く
木枯逝く茫茫六十年目のさくら
誰の老後も淋しさ募る蝶の昼
夢の世に木枯偲ぶ花筵
*
轉れる樹に触れ生命愛しめる
二〇一四年二月十一日 傳句会

お世話になった阿部寒林先生が十
月三〇日に眠るやうに大往生なされ
た。享年九一歳と知り驚いた、もつ
とお若いと思つてゐた。「あを」十周
年の記念品に会員全員に句集を作つ
た。その折会友の諸先生方にも作ら
せていただいた。「一」は句会で出句
なされた作品集なので不満な点多々
おありのことと思ふが、一同で先生
の思ひ出の縁としてここに掲載させ
ていただく。八田木枯先生にはあを
句会に来て下さる理由をおたずねし
た会員がゐた。しかし寒林先生には
訊かずじまひであつた。句会で木枯
さんと楽しさうに談話なされている
様子は傍で見ても羨ましいくらい
であつた。「あを」には最後の力を
振絞つて木枯さんのこと、想ひ出の
俳人のことを書いて下さつた。今は
大切な宝物になつた。 合掌
佐藤喜孝

自詠自読

わが軒の氷柱大いなるを誇る

じょう

初夢か拳ほどいてやりにけり

喜孝

いわけですから、一字でも省く方が俳句らしい、と判断したのですが、さて。

この句、頭初は「わが軒や氷柱の大いなるを誇る」でした。

詩歌では、賈島の来由を待つまでもなく一字が詩句の成功を左右することみな経験していますし、殊に俳句の場合どこで切るかが重要事ですけれど、その殆どは、作り手が苦心する程のことのない、どちらでもいい字句。結局掲句の形で投稿したのでした。

どうしてもなくてはならぬ、というのは、文法上の過誤を別にすればリズムの上の要不要であることが多い。

拙句はいずれにしても破調であることを逃れ得な

夢を見て起きた。時計は2時56分であつた。夢では明日死刑が執行される人間になつてゐた。その日までは他の死刑囚のことを黙つてみてゐた。死刑といふことに目を逸らしてゐれば自然に終わることだと何も看守に話さず黙してゐた。それが明日といふことになると、突然看守に向かつてしゃべりだした。私の錯誤からはじまり大勢の人の錯誤で起きた事故だと。しかも誰も死んでゐない、それなのに殺されるとは理不尽だと喚きはじめた。国やあなたの方が殺人者だと叫んでゐた。睡眠剤で眠つてゐるうちに執行してほしい。私の人生が殺されて終わる意識など持つてゐたくない。とそのやうなことを町の路地で叫んでゐた。余りに変な夢なので慌てて書き留め

た。3時7分に書きをへた。
夢を見るのも疲れるものだ。

訃報欄になつかしき人朴の花 藤穂

この句を作った時は、子供達が小さい時にご縁をいただいたバイオリニストの外山滋さんの訃報を知ったの事だったが、昨日又訃報欄をみてはっとした。高倉健さんの訃報が大きく伝えられている下の小さな欄に、片山明彦さんの訃報があったからだ。

山本有三といっても片山明彦といっても、もう今の人達にはわからないかも知れない。

戦前、戦争の足音が近づきつつある頃だが、山本有三氏は少年少女にも向く良い作品を沢山世に送り出していた作家だ。「真実一路」とか「路傍の石」とか、当時知らない人はない名作だ。その二つが映画になって、その子役として登場したのが片山明彦少年なのだ。

氏と母親で女優の美しい女性、それに、それもまた可愛く美しい妹と、も一人大人の男の人と五人連れだった。明彦少年は色白の、どちらかといえばちよつとひ弱な感じのする本当に美しい少年だった。

河口湖をまわる間、みな物静かだった。その時は私より年下のように思ったが、今日訃報を欄をみると八十八才と書いてある。ではほぼ同年、彼の方が数ヶ月年上だったのかも知れない。彼は青年時代に少し俳優として出ていたが、その後記録映画の演出家に転向したと書いてあるから、あまり世の表面には出なかった。

今日の訃報欄をみて、私は一気に七、八十年昔のあの日にタイムスリップして、あの日のドキドキ、あのボートの中の不思議な静けさ、あの美しい一家、夢の中の出来事のように甦って、不思議な感慨におそわれております。

(平成二十六年十一月二十日記)

「路傍の石」の吾一少年は貧しい環境の中で必死に努力する姿が共感を呼んだ。戦前は家の事情によって小さい時から働きに出されるのは普通のことだった。そうせねばならない切ない母の心、それに応えようとする少年の心なども描かれていたように記憶している。

あれは、小学校の高学年だったか女学校の一年だったかさだかではない。夏休みになると私は父母の郷里の山梨によく遊びに行った。

母の生家は甲府駅前の土産店で、伯母さんは私達がゆくとよく映画に連れていってくれたり、どこかに遊びに連れていってくれた。その時は姉と私、姉や私と同じ年の従姉達も一緒に河口湖へ連れて行ってくれた。そして河口湖で遊覧ボートに乗ったのである。それは小さな遊覧ボートで、私達一行と、もう一家族が乗り込んだ。八つ年上の姉はもう社会人だったかも知れない。その家族を見て姉が私に囁いた。「片山明彦よ。」少年は父親の映画監督、島耕二

松ありてこそ櫻花いまさかり 桂子

毎日何時間も歩くという規則正しい生活をしているのではありませんが、たまに少し遠くへ足を延ばす事があり、其の時に眼にした景色でした。

垣根もなくかなり広いお庭の奥まった所に古木ではないがよく手入れをされた松が見事な枝ぶりを伸ばしています。其の広いお庭の道路に近い所に、桜の若木がこれ以上は花を付けられませんと言った様な感じで咲き誇って居りました。

私は自分の立つ位置を少し変えると、奥の形の良いい松のみどり色を背景にした、淡い桃色の桜の満開は、何処かの美術館で目にしたような絵画か、一幅の掛け軸のような日本的な美しさに、暫く見蕩れて居りました。

毗をこぼれおちたる春の月 恭子

春になるとなかなかスキッと私はしなくなってしまう。何故だろう。スキッとしなくなるのは、きつとこの季節が好きでのめり込んでいるのだろう。そんな時なんとなく過ごしたいなんとなく過ごしている。きちきちときまりよく過ごすのもいいのだけれど、のほほんとその日の流れにながされ、いつの間にか夜になりいつの間にか朝を迎える。他の季節に比べると、春は特にそうだ。春以外の季節は夏秋冬はびちびちと一日を過ごしているのかと言われれば、自分ではそのつもりだ。そんな春の一日の終わりふと見上げた空に欠けた月がひかっていた。満月の月に出会うといい気持になるが、欠けた月をみると何故か気が落ち着く。四季それぞれに満月もあれば三日月もある。春の月は朧おぼろしている様に感じる。そんなおぼろ月から目を離れたすきに隠れてしまった。

子も母も這ふやうにして蟻の穴 裕子

また公園の中で、同じ物を見ながら子供に語りかける話は沢山あるだろう。子供が話しかけているのに、ちらちらスマホを見ながら答えている親を見ると、今しかない親子の時間をもっと大切にしたらと言いたくなるのは、私の余計なお節介だろうか。蟻の穴と一緒に眺めるようなお父さんお母さんも、数多くいるであろう事を願ってやまない。

朗らかに山椒薔薇の開きをり 石動

夫婦仲拔群…とは言い難い私ども（複雑なる表現ではある）ではあるが、時に、二人で出かける時あり。ある休日「とつても素敵な花を見せてあげる」につられて、14年7月号30頁に登場する「天目山栖雲寺」傍の、何でもない川つ淵へ。そこで、こんもりした木に咲いていたのが、このサンショウバラ。一重咲きの、ふんわりとした径5cmほどの淡紅色の花。つい、妻の目を盗んで「枝盗人」をしてし

抗癌剤治療も後数回で終りという頃、主人に誘われて浜離宮に菜の花を見に行った時の句である。大勢の人が菜の花を眺めて歩いている中に、菜の花の通路にしゃがみ込んで、花じゃなく地面に顔を近づけている母親と三歳位の男の子がいた。近寄って見ると、幾つも小さな穴があいていて蟻が出たり入ったりしていた。子供だけでなくお母さんも一緒に見入っているのがとても微笑ましく、こちらまで嬉しくなり、菜の花より、親子の様子を暫く眺めていた。

昨今、携帯電話にスマホと、文明の利器が次々に開発され、老いも若きも大いに利用し、その恩恵に与っている。電車の中を見廻しても、公園や道路でも、驚く数の人が携帯やスマホに夢中になっているのを見かける。便利な世になったと思う反面、残念なのは、電車の中や公園、散歩中に見かける親子の中に、スマホに夢中になっている親をよく見る事だ。親子で車窓の景色を眺めたり、散歩の道々で

まう。帰宅して、ありあわせの鉢へ挿木したところ、ありがたくも根付いてくれ、翌年から毎年咲いてくれる。

09年12日・10年14日・11年16日・12年13日・13年16日・14年は10日の五月に開花してくれた。鳥も花も、毎年同じ頃啼き咲いてくれる。

派手な花ではなく、ほわっと純朴そのもの。田舎のお千代ちゃん…といった風情。だから「ほがらか」と言いたかった。

後刻知ったのだが、絶滅危惧種の一つとか。大切にしたいあげねば…と、思っている。

死は条理生は不条理桃剥けば じょう

今はだれも言わないが、かつて難解俳句という言葉がありました。草田男・楸邨・波郷の人間探求派といわれた方々もそういわれたし、喜孝さんの師の瀧春一さんも、私の二十代にはその中のひとり、と

私達はみていたのです。

仲間の一人が春一選の句会に参加することがあって、厳しい選だった、と長嘆息したのを今も記憶しているのです。

何十年も俳句を読んできると、難解句前衛句ひつくるめて、いい句は佳い、こけ威しの句はこけ威しに過ぎぬ、とわかってくるもの。

ああものを思へば筍飯のこる 清水径子

作者は秋元不死男の弟子。俳句本道のまん中を歩いた俳人、と私なら理解するのですが、そうみない俳人が結構いるのは、未だに楸邨の句を理会し得ない方がいるのと同等のことなのでしょう。単に生活体験の相違による理解しにくさとはちがうのです。「何かがありそうな句だ」という言いかたはそんな人々には理会の外なのです。曖昧さを嫌うことと佳き俳句を上手に鑑賞することとは同等ではない。一たす二が四にも五にもなるのが詩歌なのですから。

そしてここ迄書いてきて、はたと困りました。冒頭の拙句の隠喩ととられては、と。

違うのです。拙句はこけ威しの句なのです。説明すればなんだつまらぬ、という。以下説明すると、「条理」とは「道理」のこと。人にとり死は当たり前のことですから「死は条理」。対して「生」は

死なば野分生きてぬしかば争へり 楸邨

にあるごとく実に不条理。いろいろなことが起こるのは生あるゆえ、なのです。

邪氣を払い生命力の象徴とされる桃を剥いたとき死と生を思った、と。正岡子規の言うように、「実にくだらぬ」句なのです。条理、不条理などの漢語を遣い、少し離れた「桃剥けば」の語をとり合わせると、一見難しそうな句に仕上がるのです。

あをキーワード俳句辞典(くせーくち)

癖

ダリヤ咲き放言癖が抜け切らず	栢森 定男
下を向く癖のよきかな落葉道	後藤 志づ
冬構癖と言はれしひとり言	鎌倉喜久恵
同行におなじ癖あり春時雨	芝宮須磨子
一人居の床の寝癖を春の風	渡邊 友七
極楽が祖母の口癖冬至風呂	木村茂登子
云ふことを聞かぬ癖つ毛春の風	篠田 純子
近頃は忘れ癖つき春帽子	鈴木多枝子
遅れ癖今もつづきて十三夜	吉弘 恭子
小正月帯に折りぐせ結び癖	芝 尚子
ごろ寝する癖のつきたり長茄子	田中 藤穂
何食はん夫の口癖花八手	斉藤 裕子
行秋や古九谷の蔓伸びやかに	赤座 典子
粥柱歯痛の口を傾けて	江倉 京子

九谷

わらび菓子口いっぱいにひろぐる香	河合 笑子
言訳は口に出すより浅刺汁	東 亜 未
和三盆口にとろける梅雨湿り	早崎 泰江
花屑のながれ入るまま鯉の口	竹内 弘子
晝さくら口を合はせてゐる鳥	佐藤 喜孝
ぼうぶらの百の眼に百の口	吉弘 恭子
肩落し口を窄める寒菹	長崎 桂子
炎昼や生きるものみな口あけて	篠田 純子
岩清水二の腕ぬらし口すすぎ	芝宮須磨子
水底に冬日のゆるる鯉の口	森山のりこ
獅子舞の口ひらききる春の風	渡邊 友七
桃食ぶる母の口もと幼なくて	鎌倉喜久恵
ささくれし国焼酎を口にする	堀内 一郎
口に出しもうすぐ春と言ってみる	田中 藤穂
口に出す寒さ黙ってゐる寒さ	芝 尚子
秋海棠口パク少女と言はれても	赤座 典子
紫陽花やときどき浮ぶ鯉の口	吉成美代子
秋の陽をぞんぶんに受け鯉の口	大日向幸江

十二月

吉弘恭子

昼の月青く透くから美しき冬

体温をもらふ途中の冬の蠅

山茶花や憤怒の虫をねむらせる

薄氷白菜漬はピンとはね

職人のかたき笑ひの十二月

風の色日の色重し十二月

高くなかく犬啼く冬に首のべて

掌にぐずぐずしてる落椿



毎月25日発売
定価1200円(税込)

月刊俳句界

2015年1月号

新春特別対談
稲畑汀子×稲畑廣太郎
主筆交代から一年 ◎司会・坂口昌弘
結社の継承と「ホトギス」の未来を語る

作品 大牧 広 鈴木貞雄 嶋田麻紀
《ラビエ》 俳句界NOW 大木あまのり

現代俳人の肖像
有馬朗人 稲畑廣太郎 茨木和生
大申章 角川春樹 坂口緑志
高野ムツオ 辻桃子 豊田都峰
夏石番矢 西池冬扇 保坂リエ
宮坂静生 大高霧海 佐藤麻績
田中陽 名和未知男 能村研三
山下美典 森 潮 石井いさお
岸本マチコ 古賀雪江 五島高資
朝妻 力 山尾玉藻

私の一冊 増成栗人「鴻」

魅惑の俳人 皆川盤水
佐高信の甘口でコンニチハ！

対談 田原総一郎 シャーナリスト

※一部変更の可能性あります。

株式会社文学の森 株式会社文学の森
お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

あとがき

今年も例年にならず悲喜こもも様々なことがあつてこの年の整理などとてもつかぬあひだに次の年が来てしまふのだらう。今左にある奥付欄の日付を入れた。あ、八日かと気がついた。開戦日である。さっついへば

開戦日閉つることなき埴輪の目 城台洋子

といふ句を知った。選挙戦真つ盛り、大儀も焦点も定かでないが、選挙権を大切にしなければ香港の学生に申訳ない。

(喜孝)

二〇一四年十二月号

発行日 十二月八日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090 9828 4244
ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130655526(あを発行所)
乱丁・落丁お取替えます。